様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２７２４

研究課題名（和文）イラン語史及び中央アジア出土胡語文献研究の観点からのトゥムシュク語の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive study of Tumshuqese from the perspective of Iranian language history and codicology of non-Chinese documents unearthed in Central Asia

研究代表者
荻原　裕敏（Ogihara, Hirotoshi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員

研究者番号：６０７６２１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：中世イラン語に属するトゥムシュク語による文献は、中国・新疆ウイグル自治区のトゥムシュク地域を中心に、その東に位置するクチャからトゥルファンに至る地域で資料が発見された。それらの資料は、現在、ドイツ・イギリス・フランス・ロシア・中国に所蔵されている。本研究では、文献学・古文書学・歴史言語学・歴史学的観点からトゥムシュク語文献を総合的に分析するとともに、原文書調査によって得られたコーパスに基づいて、共時的・通時的観点からトゥムシュク語の記述を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、中世イラン語に属するトゥムシュク語の言語構造の解明のため、文献学・古文書学・歴史言語学・歴史学的観点からトゥムシュク語文献を総合的に分析した。この言語で書かれた資料は、大部分が零細な断片であるため、1935年の解読以降、基本的な言語構造の解釈には大きな進展が見られなかった。本研究により、トゥムシュク語の言語構造の解明が大きく進展するとともに、トゥムシュク語世俗文書の書式には、唐朝支配下の中央アジアで流通していた文書と共通する特徴が見られる点が明らかになった。本研究によって得られた成果は、イラン語史研究・歴史言語学研究はもとより、中央アジア史の研究にも貢献することが期待される。

研究成果の概要（英文）：This research project aims at a comprehensive study of Tumshuqese from the perspective of Iranian language history and codicology of non-Chinese documents unearthed in Central Asia. Manuscript re remains in Tumshuqese, which were unearthed in the vast region from Tumshuq to Turfan in the Xinjiang Uygur Autonomous Region in China, are now housed in libraries and museums in Germany, England, France, Russia, and China. Among Middle Iranian languages, Tumshuqese is poorly researched because of the paucity of its documentation. For four years of this research project, all the Tumshuqese materials were researched. This corpus thoroughly revised during this research project can contribute to the better understanding of the linguistic structure of this language from the synchronic and diachronic viewpoint.

研究分野：中央アジア出土写本

キーワード：トゥムシュク語　中世イラン語　歴史言語学　古文書学　中央アジア史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
(1)トゥムシュク語は中世イラン語に属し、言語学的にはコータン語と最も関係が近い点が指摘されている。この言語の主要な資料は、中国・新疆ウイグル自治区のトゥムシュク地域で発見されており、1935 年に最初の解読が提示されて以降、極少数の研究者によって言語構造が解明されてきた。この言語の比較的まとまった資料は世俗文書であり、文書中に在証される漢語からの借用語や漢籍史料の記述から、文書の年代は 7-8 世紀頃に比定されている。

(2)研究代表者は主にトカラ語文献学に従事してきたが、トゥムシュク語文献には、借用語などにトカラ語からの影響が見られるだけでなく、トカラ語文献から翻訳されたとされる文献の存在も指摘されていたため、トゥムシュク語文献の研究も並行して行ってきた。トカラ語文献を原典とすると推定されてきた文献を扱い、この文献が必ずしもトカラ語原典を前提とするものではない点を、応募者が比定に成功したトカラ語文献を利用して論じた事を発端とし、その後旅順博物館や図木舒克市文物局など、中国に所蔵されるトゥムシュク語文書の解読・研究に従事する機会を得た。特に、図木舒克市文物局と共同でトゥムシュク語契約文書を解読・研究した際、ソグド語・コータン語・トカラ語・古代ウイグル語・漢語などと言った、時代・地域を同じくする他言語資料との比較が、これらの資料の解読に非常に有益である事を悟った。比較対象を従来利用される事のなかった胡語・漢語文献にまで広げた事で、新出語だけでなく、未解明となっていた部分や正確には認識されていなかった多くの語形の解釈に成功した。

(3)現在まで、全資料について原文書に基づく解読が為されていないことから、研究の基礎となるコーパスの整備、及びコーパスに基づいた、未解明語形の解明が課題と言える。各国に所蔵されるトゥムシュク語原文書の網羅的調査とその文献学的研究を行い、進んで他言語資料との比較並びに言語学・文字学・歴史学・仏教学と言った学際的な観点から、総合的に検討する事を目的とし、研究代表者は、研究活動スタート支援「中央アジア出土胡語・漢語文献との比較によるトゥムシュク語文献の総合的研究」に二年間従事してきた。本研究では、この二年間の研究成果に基づき、トゥムシュク語文献解釈の完成と文献に現れる語彙及びトゥムシュク語文法構造の記述、並びにその歴史言語学的解明を目的とし、併せてトゥムシュク地域における言語・歴史・宗教・文化の再構成を試みる。

２．研究の目的
(1)現在までに研究者に把握されているトゥムシュク語文献は、ドイツを中心にイギリス・フランス・ロシア・中国に所蔵されており、ドイツ及びイギリス所蔵資料はインターネットで画像資料が公開されている。インターネットで公開されている、マウエ博士によるトゥムシュク語資料の解読成果は、このような画像資料やマイクロフィルムより起こした写真に基づいた解読であり、必ずしも原文書に基づくものではないため、少なからず誤りが見られ、特に言語学的研究に際して大きな問題となっている。

(2)この点を解決するため、研究代表者は研究活動スタート支援において、各国所蔵資料について原文書に基づいた解読を行い、コーパスを整備するとともに、文書の紙質・サイズ・書式と言った古文書学的情報を収集した。ただし、ここでは、ドイツ及びロシア所蔵文書の調査のみに留まったため、イギリス・中国所蔵文書の調査とフランス所蔵文書の再確認を行う。その上で、時代・地域を同じくする他言語資料との比較によりトゥムシュク語資料の文献学的研究を進め、未解明の語彙・語形の解明を目指すとともに、特に世俗文書が果たしていた機能の解明に努める。また、当該言語によるマニ教関連木簡は、この地域でのマニ教の実態を示す資料であるため、トゥルファン出土の同種の文書との比較により解明を志す。

(3)各国所蔵資料の網羅的調査を通して得られたコーパスと、その文献学的研究による成果を利用して、トゥムシュク語の言語構造の解明を行う。同時に、歴史学・仏教学などの知見を利用して、8 世紀頃における当該地域の言語・歴史・宗教・文化を再構成する。また、当該地域は東西文化交流の要衝であった事から、特に世俗文書の書式から窺う事ができる東西文化の影響を手がかりに、言語文化の交流と融合の総合的解明を目指す。

３．研究の方法
(1)ドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国の各所蔵機関を訪問し、トゥムシュク語文献の原文書調査を行い、研究の基礎であるコーパスを整備する。特に、仏典とは異なり、世俗文書は草書体で書かれており、公開された写真に基づいた解読には困難を伴うため、原文書に当たっての調査が不可欠である。また、文書の紙質・サイズ・書式と言った古文書学的情報も、併せて収集する。

(2)完成したコーパスを利用して、コータン語・ソグド語・トカラ語・古代ウイグル語・漢語・バクトリア語などといった時代・地域を同じくする他言語資料との比較研究を進め、内容の比定及び平行箇所の確定を行い、在証される言語形式を解釈する。ただし、この言語を書き記すために用いられたブラーフミー文字は、語を分かち書きせず、外見上、語の切れ目を判断する事ができないため、先行研究での分析が正しいとは限らない。従って、改めて言語構造全体の再検討を行う必要があり、他の文書に現れる形式や同系言語である他のイラン語との比較及び借用語の確定も同時に進める。一方、借用語や他言語資料中の平行箇所は、言語接触や言語文化交流の手がかりを提供するため、これらの確定を重視する。

(3)上記の他言語資料との比較を通して、トゥムシュク語の言語構造及びトゥムシュク地域の歴史・宗教・文化等の研究を行い、中央アジアにおける東西文化交流の観点から、当該地域での言語文化の接触・融合の実相を解明する。また、この研究を通して得られた成果を基に、歴史言語学的観点から、トゥムシュク語のイラン語内部における位置づけも再検討する。

４．研究成果

(1)四年間の研究期間を通して、現在把握しているトゥムシュク語文書全点の調査を完了した。極一部の文書を除いて、これらの資料は画像に基づいたローマ字転写のみが提出され、研究に利用されてきたため、当初より原文書調査を本研究の主目的としていた。これにより、トゥムシュク語研究の基盤が、漸く整備されたと言える。

①フランス所蔵のトゥムシュク語文書については、主にマイクロフィルムより起こした写真に基づいた転写が公表されているが、調査によって既公表の転写に対して多数の修正を行うとともに、これまで不明であった文書の紙質・サイズなどの古文書学的情報も収集する事ができた。

②トゥムシュク語によって書かれた資料は、多くが零細な断片であるにも拘わらず、原文書に基づいたコーパスは、殆どの場合、提示されていなかった。本研究の調査によって、先行研究で提出されていたローマ字転写には、多数の修正が必要である事が明らかになった。従来利用されてきたコーパスの改訂、並びに先行研究で提出された内容についても、再検討が必要である。現在、調査で得られたコーパスを利用して、トゥムシュク語の言語構造の再検討を行っている。

(2)トゥムシュク語は中世イラン語に属しており、特にコータン語と最も近い関係にある点は、1935 年の解読以来指摘されるところである。実際、古代イラン語からの音変化や言語構造、及び個々の語形については、コータン語が当該言語の解明に際して重要な役割を果たすことが多い。しかしながら、コータン語の知識のみでトゥムシュク語を解読する事はできず、その他の中世イラン語やイラン語史の知識も必要である。本研究では、トゥムシュク語の言語構造に関する発見について、研究発表を行うとともに、論文を出版した。

①トゥムシュク語の世俗文書に見られる、いくつかの語形とその用法及び語源についての研究成果を英語で論文化の上、ヨーロッパの研究雑誌にて発表した。当該の論文で明らかにした成果は、クチャ語やコータン語・ソグド語・バクトリア語といった同時代・同地域に由来する世俗文書との比較研究によって得られたものであり、本研究で採用した方法論が最も有効に働いたものと言える。この論文で明らかにしたのは、-aa-語幹と呼ばれる名詞の格変化、数詞の「千」、「主・君主」を表す名詞の呼格形が、手紙文書や報告書において二人称の敬称として用いられる点などである。れらの成果は、トゥムシュク語の研究はもとより、イラン語史研究にも貢献し得るものであるが、特に最後の点は、クチャ語やコータン語・ソグド語・バクトリア語文書でも見られる用法であり、中央アジア地域における同種の文書の書式の比較研究に貢献する。

②フランス所蔵のトゥムシュク語資料に関する研究成果を、ベルリンで開かれたヨーロッパ・イラン学会第九回大会にて、英語で発表した。ここでは、フランス所蔵トゥムシュク語文献の全体像を紹介するとともに、これらの資料に現れるいくつかの語形に対する研究代表者の解釈を提示した。発表した研究成果は、従来異なる解釈を与えられてきたものであり、トゥムシュク語の形態論・語彙研究だけでなく、イラン語史研究にも貢献するものである。現在、これらの成果を二本の英文論文としてまとめ、ヨーロッパの研究雑誌及び書籍に投稿する予定である。

(3)トゥムシュク語文献の解読に貢献し得る新資料、特にクチャ語文献の発見について、研究発表を行うとともに、論文を出版した。

①研究代表者は、これまで殆どが知られていなかったロシア所蔵のトカラ語資料(大部分がクチャ語資料)の体系的な調査を行い、その主要な成果について、日本語で論文を執筆し、発表した。当該の論文で紹介した新資料は、これまで学界に公表されたことがなく、トカラ語文献研究だけではなく、トカラ語資料を扱う研究に大きく貢献すると考えられる。このロシア所蔵資料の調査完了によって、現在各国に所蔵され、海外の研究者がアクセス可能なトカラ語資料の殆どを把握することができた。クチャ語文献とクチャの仏教文化は、トゥムシュク語文献とその仏教文化の成立に大きく影響を与えたとされるため、トゥムシュクの仏教文化や文献研究に対して、今後の

貢献が期待される。

②ロシア所蔵のクチャ語資料中、内容の比定に成功した断片 3 点について、研究論文を執筆し、その内の一本を所蔵機関の雑誌に英文で発表した。この英文論文で発表した断片は、ハリシュチャンドラ・アヴァダーナと称される物語であり、古代ウイグル語にもパラレルが見られ、中央アジア地域における仏教説話伝播の一例と見做すことができる。トゥムシュク語文献にはこの物語に比定される資料は知られていないが、トゥムシュク語文献おける他の仏教説話と併せて比較を行うことで、トゥムシュク語による仏教説話の特徴の解明にも貢献すると考えられる。

③研究代表者は、以前、ロシア所蔵のクチャ語断片調査の際、ヴェッサンタラ・ジャータカと称される物語に比定されるクチャ語断片を一点発見し、この断片の位置付けに関する研究発表を行った。本研究の調査によって、さらにもう一点、当該の断片と直接接合する断片を発見した。これにより、ロシア所蔵のクチャ語文献には、二点のヴェッサンタラ・ジャータカ断片が存在することが明らかになった。この三点のクチャ語版ヴェッサンタラ・ジャータカ断片について、比較研究を行い、日本語で論文を発表した。

④上記ヴェッサンタラ・ジャータカには、フランス所蔵のトゥムシュク語断片三点の存在も知られており、既にマウエ博士の転写も公表されているが、その転写は原文書に基づかず、断片の接合関係が誤っていることも、本研究で明らかになった。クチャの仏教文献と仏教文化がトゥムシュク地域に与えた影響に鑑みて、このクチャ語版の発見は、トゥムシュク語版の解読に大きく貢献することが期待される。実際に、両者の比較対照研究により、部分的に一致する記述が見られることを発見した。現在、トゥムシュク語版の校訂と比較研究を行っているところであり、その成果の一部を中国語論文として発表した。この記述は、他の言語のものには見られず、クチャ語とトゥムシュク語のものにのみ確認されることから、両者の関係が近いことを窺わせる。

⑤トゥムシュク地域の仏教成立に大きく影響を与えたクチャ仏教に、どのような仏教文献が伝えられていたかという点については、現地で出土する文書や漢籍の記載から、ある程度推測を行うことが可能である。研究代表者は、ドイツ所蔵のクチャ語文献中に、クチャ地域に伝えられた阿含経典のリストと見られる断片が存在していることを発見し、当該の断片と文献資料に基づいて、クチャ地域に伝えられた阿含経典に関して、カナダにおいて英語で研究発表を行い、その後、その修正版を英文で論文化、現在印刷中の段階にある。当該の断片からは、少なくとも、『小阿含』を含めた五つの文献からなる阿含経典が、クチャに伝えられたと考えられる。この発見は、どのような阿含経典が実際に中央アジア地域に伝えられていたかを具体的に示しており、漢籍の記述だけでは窺えない重要な情報と言え、仏教史研究に貢献する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Ogihara Hirotoshi	４．巻 -
２．論文標題 Rethinking Tocharian B smaaN	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Adam Alvah Catt, Ronald I. Kim, and Brent Vine (eds.) QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European studies in honor of Kazuhiko Yoshida	６．最初と最後の頁 278-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荻原裕敏	４．巻 40
２．論文標題 ロシア所蔵トカラ語文献に関する覚え書き	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京大学言語学論集・電子版(eTULIP)	６．最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荻原裕敏	４．巻 32
２．論文標題 ＜書評＞Yukiyo KASAI, Abdurishid YAKUP and Desmond DURKIN-MEISTERERNST (eds.),: Die Erforschung des Tocharischen und die alttuerkische Maitrisimit (Silk Road Studies XVII). Turnhout : Brepols, 2013.	５．発行年 2017年
３．雑誌名 内陸アジア言語の研究	６．最初と最後の頁 151-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ogihara Hirotoshi	４．巻 2018(1)
２．論文標題 A newly identified Kuchean fragment of the Hariscandra-avadana housed in the Russian collection	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Written Monuments of the Orient	６．最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 OGIHARA Hirotoshi with a contribution by Lilla Russell-Smith	4．巻 20
2．論文標題 A magical practice to protect children from the demons in Kuchean Buddhism: Research on THT 3998 kept in the Museum fuer Asiatische Kunst in Berlin	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Tocharian and Indo-European Studies	6．最初と最後の頁 163-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Ogihara Hirotoshi	4．巻 63
2．論文標題 Miscellany on the Tumshuqese documents	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Central Asiatic Journal	6．最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荻原裕敏	4．巻 下冊
2．論文標題 捨己濟人的自在王子―― Vessantara-jaataka之梵、漢、亀茲、粟特諸本比較	5．発行年 2021年
3．雑誌名 鄭阿財主編『張広達先生九十華誕祝寿論文集』新文豊出版公司	6．最初と最後の頁 985-1022
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ogihara Hirotoshi	4．巻 -
2．論文標題 Aagama texts transmitetd to Kuchean Buddhism	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Festschrift to anonymous scholar	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荻原裕敏、慶昭蓉	4．巻 -
2．論文標題 略論「梵語雑名」漢字音写方式的発声特色	5．発行年 2021年
3．雑誌名 栄新江編『「絲綢之路上的中華文明」論文集』	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ogihara Hirotoshi	4．巻 vol. 1
2．論文標題 Tumshuqese imperfect and its related forms	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Pavel B. Lurje (ed.) Proceedings of the Eighth European Conference of Iranian Studies	6．最初と最後の頁 297-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ching Chao-jung	4．巻 vol. 1
2．論文標題 The four cardinal directions in Tumshuqese	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Pavel B. Lurje (ed.) Proceedings of the Eighth European Conference of Iranian Studies	6．最初と最後の頁 66-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Ogihara Hirotoshi
2．発表標題 Tumshuqese material preserved in the French collection
3．学会等名 Ninth European Conference of Iranian Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Ogihara Hirotoshi
２．発表標題 Comparative study between the Chinese Buddhist texts and manuscript remains in ancient languages of Xinjiang: Kuchean version of the Vessantara-jaataka
３．学会等名 国際ワークショップ「絲綢之路上的中華文明」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ogihara Hirotoshi
２．発表標題 A newly recognized Khotanese wooden tablet kept at the State Hermitage Museum
３．学会等名 First International Congress of the Eurasian Association of Iranian Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 荻原裕敏
２．発表標題 クチャ地域に伝えられた有部の仏典
３．学会等名 西域桃源　大谷探検隊から見たクチャの仏教文化（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 荻原裕敏
２．発表標題 旅順博物館所蔵吐火羅語残片的特色及語言文献学分析
３．学会等名 「新疆出土文献与絲綢之路」国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 荻原裕敏
２．発表標題 従石窟題記思考亀茲学与吐火羅語研究的新方向
３．学会等名 北京大学與絲綢之路―中国西北科学考査団九十周年高峰論壇（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	慶昭蓉 (Ching Chao-jung)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Museum fuer Asiatische Kunst			